

## 青い空と白い雲

私は毎朝空を見ます。最初は起床したときで、服を着ながら南に面した2階の窓から眺めます。朝の空気は澄んでいるので、晴れていれば青い空がきれいです。窓の下の庭の緑が色を添えています。次は新聞を取りに出る時で、薄着のままですから春は冷たさを、秋は爽やかさを、冬は寒さを体感しながら空を見上げます。この時は庭の緑だけでなく、斜め前の公園の樹々と灌木が視野に加わります。雲を見るのは、出かける午後と夕方が多いです。白いちぎれ雲が青空に浮かぶのも、夏の入道雲が湧き上がるのもきれいです。青い空と白い雲は、遠い昔から誰にでも与えられる贈り物でした。

しかし日本では、この贈り物が少ない時代と地域がありました。手元には日本の空の写真があります。1939年の八幡製鉄所（現：日本製鉄）では、数十本の背の低い煙突が黒い煙を吐き出していて、一帯が煤にまみれた灰色に覆われています。同じ場所の1960年代の写真では、太くて短かったコンクリートの煙突が、細くて高い鉄製に代わっています。でも吐き出しているのは、黒い煙に酸化鉄の赤い煙やセメントの白い煙が加わり、青い空はわずかにしか映っていません。同じ頃の四日市コンビナートの写真では、少なくとも20本以上の高煙突が黒と白の煙を空高く吹上げています。工場地帯から遠い大阪中心部の写真には、オフィスビルや自動車が映っていますが、全体に霞がかかっているようで、100メートル離れた建物は輪郭しか確認できません。都心部から遠く離れている大阪城でさえ、上空は白いスモッグに覆われています。ところが1970年代の後半になると、京浜工場地帯では黒い煙を出している煙突がありません。数えられる10本ぐらいの高煙突が、白い煙を出しているだけです。1990年代になると、もう煙を出している煙突を確認できません。2000年代の写真では、四日市も京浜地区も鹿島コンビナート地区も空の透明度が高くなり、遠く離れた港湾や道路までくっきりと映っています。日本は1970年代から2000年代に至る約30年で、大気環境を大幅に改善したのです。

一方、多くの新興国では1960年代の日本と同じ状況が続いています。これらの国が美しい空を取り戻すのに、日本のエネルギー政策や環境政策、それに大気汚染防止技術が役に立つことを期待しています。